

死者儀礼のキリスト教的意味付け

—大森めぐみ教会の事例より—

川 又 俊 則

目 次

1. 問題の所在
 - (1) 研究目的
 - (2) 研究対象と方法
2. 指導者たちのキリスト教的意味付け
 - (1) 岩村牧師の場合
 - (2) 他の教会・教派の牧師の場合
3. 大森めぐみ教会会員調査分析
4. 個別事例分析
 - (1) 儀礼（葬儀・記念会等）
 - (2) 家庭内宗教施設（仏壇・祭壇等）
 - (3) 家庭外宗教施設（墓地）
5. 考察

1. 問題の所在

(1) 研究目的

本稿は、死者儀礼に対してキリスト教信徒は如何なる意味付けをしているか、そしてどう対応しているか考察することを目的としている。そこで、始

めに死者儀礼の定義をしておく必要がある。本稿では単なる葬式のみを死者儀礼というのではない。葬式・記念会・墓参等を含んだ広い概念で使用している。類似の用語に先祖祭祀や祖先崇拜がある。これらの用語は単に死者を追慕するための儀礼を指し示すのではない。亡くなってから祖霊となるまでの供養の側面があり、その霊は崇るもの或いは子孫の繁栄の為に加護をもたらす守護神的存在であるという認識を含んでいる。しかし、キリスト教では偶像崇拜を禁止し、死者はすべて神の下にあると教義づけている。従ってこれらの用語は到底認められまい。そこで、宗教的意味付けが異なっている、葬式や墓参等の死者に対する一連の儀礼・行為に関して、筆者は中立的な用語として死者儀礼を採用することにした。

本稿では様々な宗教儀礼の中で、特に死者儀礼を扱う。キリスト教は主として個人の信仰を強調するが、死者儀礼は家族的親族的であるから、信徒は家族の成員である限り何らかの関わりを持たざるを得ない。ところで、日本における死者儀礼は、江戸期以降に根づいた仏教様式が現在も続いている。江戸期以前に渡来したカトリシズムは、一部キリシタンとして残ったが、禁教後多くは明治期まで途絶えた。江戸末期にはプロテスタンティズムも渡来して、新旧両教共、法制上は1873（明治6）年2月の切支丹禁制の高札撤去以降黙認されることになった。しかし、当時のキリスト教信徒は自らの信仰のために、特に死者儀礼において、具体的には仏壇を廃棄したり、禁じられていた自葬をしたりして、仏教と対決した⁽¹⁾。また、先行研究によれば、農村でキリスト教が受容された場合、仏教と同様に「家」の宗教として定着することや先祖を大切にする傾向があると指摘されている⁽²⁾。

本稿はこのような歴史的背景を持ち、信徒数がいまだ日本全人口の1%に満たない状況下⁽³⁾の現代キリスト教信徒を対象とする。人口が少なければ、クリスチャンホーム⁽⁴⁾でないケースが多いと予想される。その場合、信徒であってもすべての儀礼をキリスト教式で行うのは困難だろう。それでは信徒はどうやってこの状態に対処しているのか。当然のことながら、各教会の指導者たちはキリスト教的意味付けをした死者儀礼を推進実行しているであろう。だが、彼らとは立場が違う信徒たちは現実にはどのような行動をとり、

意識しているだろうか。それを観察し、指導者たちのそれと比較分析するのが本稿の目的となる。

(2) 研究対象と方法

信徒が死者儀礼にキリスト教的意味付けをしなければならないのは、日本で通常行われている死者儀礼が仏教色の濃いものだからである。キリスト教諸教派は、葬式はあくまでも生者のために行い、「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」〔マタイ福音書 8・22〕としており、また、偶像崇拝の禁止から死者を拝んではならないとする。そのため非信徒たちの間、つまり世間一般には「先祖に冷たい」というレッテルを張られてきたきらいがある。新教側は現在でも統一した儀礼を提唱するに至らず、教派ごとに死者儀礼の位置づけが異なる。旧教側は 1965（昭和 40）年の第 2 パチカン公会議により大きく方向転換したが、その結果に関する日本の教会の資料はまだ見当たらない。

そこで本稿では、新教の中で最も信徒数の多い教派である日本基督教団に所属する一つの教会で得た資料をもとに考察をすすめることにした。東京都大田区池上にある大森めぐみ教会である（写真 1）。1992（平成 4）年 3 月 31 日現在の現餐会員数は 423 人で、東京都内の教団所属全 277 教会のうち上位 9 番目という大規模な教会である。1927（昭和 2）年に創設され、先頃創立 66 周年を迎えた。初代牧師は岩村清四郎氏で、現在はその次男岩村信二牧師が二代目となっている。幼稚園を創立当初から設置しており、清四郎牧師は霊南坂教会で日本最初の宗教教育主任を、その妻安子氏はキリスト教保育連盟の会長を、信二牧師は日本基督教団教育委員長を務めるなど、大変熱心に教会教育を一貫して行ってきた。

創設から現在までの歴史を略述する。

創設者の岩村清四郎は霊南坂教会で小崎弘道牧師より洗礼を受け、その長女安子と結婚して安子の母方の姓を継いで岩村姓となった。めぐみ教会創設以降は海老名弾正や実兄の木村清松等の伝道会を行い、順調に会員が増加していった。1941（昭和 16）年に日本基督教団創立により第 3 部に所属した。

空襲で教会は全焼して、以前より合同礼拝をしていた東大森教会と1947（昭和22）年に合同して大森めぐみ教会と改称した。翌年コンセット・ハウスの会堂ができて、更に1951（昭和26）年には木造の礼拝堂が完成した。以降、増築や施設の充実が図られた。

東京帝国大学哲学科を卒業し、ハートフッド神学校に留学した岩村信二は、1956（昭和31）年正牧師に就任した。彼は『キリスト教の結婚観』『情況の倫理』等多くの著作を出版し、教会教育による伝道の他、著述による啓蒙をも図った。一方、社会福祉法人「牧人会」が設立され、1972（昭和47）年に白河めぐみ学園を開園したのを端緒とし、以降、こひつじ園、あだたら育成園等の身障者施設を経営して福祉問題に取り組んでいる。更に、1976（昭和51）年には大森西伝道所を開設、1984（昭和59）年にはそれを移転して平和島伝道所とした結果、伝道範囲が拡大した。

死者儀礼に対する牧師の意味付けとそれに対する教会員の動向をみるために、牧師の方は主に著作をもとに、教会員の方はこの教会で実施した調査票による会員調査、及び二度の座談会と個別の面接調査の結果をもとに分析していく。そして、第2章で牧師による意味付けをみて、第3章4章では教会員に関する全体と個別の分析考察を行う。

調査法について略述すると、まず調査票の調査に関しては以下の通りである。

調査票は森岡清美成城大学教授と磯岡哲也淑徳大学助教授が作成した。対象者は遠方や大学生年齢に達しない者を除いた会員340人を抽出した。そして、1991（平成3）年9月下旬の日曜礼拝終了後配付し、配付できない分は10月に郵送した。翌11月までに郵送で返送されたものについて、記入不十分な部分を電話にて補充して、210名の有効回答数を得た。有効回答率は61.8%である。そのうち客員会員2名と宣教師2名を除いた206名、156世帯について分析した。この会員調査の主たる目的は教会教育の成果を確認することであり、その点については、森岡教授・岩村牧師共著の報告書が出版されるのでここでは割愛する。本稿では死者儀礼に関する部分に焦点をあてて、教会員の全体的な傾向を探る。

座談会は1992（平成4）年4、6月に「仏壇のある人の座談会」「仏壇処

理の座談会」と題して、それぞれ 27 名、33 名の出席者を集めて行われた。仏壇を現在保持している人や処理した人が参加し、持つ契機や現況を語った後、岩村牧師がそれに対する感想や今後の処理についての提案を述べられた。また、1993（平成 5）年 9 月には川又が単独で個別面接を行った。対象者は仏壇を持つ 49 世帯と祭壇を持つ 4 世帯のうち、1993 年 7 月発行の名簿に記載されていた（転会、もしくは死去のなかった）45 世帯、4 世帯のうちそれぞれ、18 世帯、2 世帯で実施した。この座談会と面接調査によって得た具体的な個別事例を取り上げた。



写真 1 大森めぐみ教会

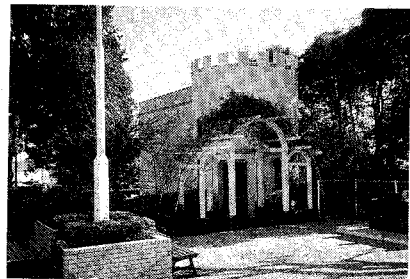


写真 2 あけぼの苑

2. 指導者たちのキリスト教的意味付け

(1) 岩村牧師の場合

岩村牧師は「教会員の関心やニーズにおいて、自分たちの家の葬式や墓や記念会について、キリスト教的に納得する方式を打ち出してもらいたいという要望が強く出されている。現実にはプロテスタント信者が迷っていたり、自信を失っていたりしている場合、正面切ってその要望に応えるのが現場の牧師のつとめではないかと思う」（岩村 1990：20）ということで、死や葬儀や記念会の問題について強い関心をもって取り組んでおられる。

前夜式（通夜）と葬儀については、前夜式は故人に対する家人の弔いの式、これに対して葬儀は牧師による神へのゆだねを重視するものとみている。そ

して、前夜式では「古来、日本人は死者の霊が祟ることを恐れました。一中略一。みなさんの親しかったご家族の方々が天国に行っているのに、何でもみなさんに不幸をもたらすなんて考えるでしょう。自分の亡きあと、みんな元気で頑張ってくれよと思っているに違いありません。むしろ、私たちの方から、『安らかに天国で憩って下さい』と祈ってあげるのが人情ではないでしょうか」〔同：30〕と死者を葬るにあたってのキリスト教としての基本方針を語る。怨霊の祟りなどの迷信・俗信には拒否の姿勢を示しつつ、キリスト教的葬りの仕方を提示するのである。

葬儀においては葬式と告別式を区分する。葬式で死者の魂を神に委ねる宗教的な式を行い、告別式で人間的なお別れをする。但し、この方式は日本基督教団で一般化している訳ではない。教団発行の『式文』を見ると、葬式と告別式の二つは分けられていない。死者が非信徒の場合も、行くのは天国しかないということで、喪主が信徒であるなら教会で葬儀を行っている。日本の教会は専ら伝道第一主義に陥りがちで、教育・社会奉仕といった機能を良く果たしてきたとは言えないという感想を岩村牧師は持っている。そこで、結婚や葬儀などの儀礼は誰もが行うものなのだから、奉仕の機能ということで非信徒に対しても執り行うことにしている。

記念会は死を受容し、一区切りをつける意味を持つため、まず50日後位に行い、後は1年、5年、10年等の区切りのよい時を勧めている〔同：54-57〕。しかし、その内容としては、法事をそのまま受容するのではなく、キリスト教的な意味付けを提示している。聖餐式と記念会を結び付けて深めようという考えから「弟子たちが主イエスを懐かしく思い出し、語り合うといったような心で記念会をもつべき」〔岩村1993：55〕であり、単なる世間話をするのではなく、故人の思い出を語らうことを強調している。

また、毎月第一日曜日にはその月の「死者のための祈祷」を実行している。全教会員の死者のリストを作っておき、遺族に前週の月曜日に葉書を出す。当日は亡くなった教会員の写真を礼拝堂の正面に飾り、名前を呼ぶと共に故人と出席した遺族の簡単な紹介をするのである。これは好評で、ふだんの日曜礼拝が平均150名であるのに対し、第一日曜日となると200名ほどになる。

岩村牧師は「生者も死者も同様に生きた人間であると思っているので、死者の上に恵みがあることを祈ることに何ら抵抗を感じない」〔岩村 1990 : 63〕と述べている。

先の座談会において、岩村牧師は仏壇の処理に関して「親族知人に預ける、寺院に返す、焼く、教会墓地『あけぼの苑』で預かる、キリスト教祭壇に替える」という五つの方法を提案した。また、そのまま保管していてもよいが、心理的葛藤のある教会員にはその取扱いを「割り切る」ように勧めた。

教会墓地⁽⁵⁾は先代の清四郎牧師も設置を求めていた。しかし、教会敷地内で造成するには近隣すべての同意書が必要とあってなかなか進まなかった。外見のデザインをお城風にして、ついに 1973（昭和 48）年 12 月 23 日に前方後円墳型のものが完成した。「あけぼの苑」という納骨堂である（写真 2）。中はロッカー式となっており、それが 200 個ある。ロッカーは一つに 6 つの骨壺が入る大きさである。工費は 1000 万円。ロッカー一つの使用料は 12 万円で、一時的な保管管理料は 5000 円、年会費は 2000 円となっている。永代祈祷料は 4 万円で、25 年間分とされている。1984（昭和 59）年夏に 200 万円をかけて内部の改装を行った。1992（平成 4）年 9 月現在、岩村家が 2 つ、後は 57 家族が 1 つずつで、合計 59 個が利用予約している。

（2）他の教会・教派の牧師の場合

本稿は一つの教会の事例報告であるが、その牧師の意図が、他とあまりにもかけはなれているのでは一般的とは言えない。そこで他の牧師・教団指導者の著書などから、死者儀礼に関するキリスト教的意味付け、教えを見ておこう。

まず、大森めぐみ教会が所属している日本基督教団の信仰職制委員会が編著した『死と葬儀』を見る。死や葬儀に関する聖書研究や英語圏での葬儀の歴史の後で「今日の日本における葬儀の諸問題」〔山本尚忠 1979 : 253-272〕を考察している。これによれば、基本的な考えとして「プロテスタント教会の葬儀では、主の十字架と復活の福音の証言を中心として、遺族への慰めと、参列者すべてに死をこえた希望が示され、遺体を丁重に葬ることがたいせつ

である」〔同：255〕とある。弔辞・献花等についての注意の後、記念会については「故人の供養とか、とりなしの祈りをする時ではない。しかし、主の恵みを感謝する意味で、日を改めて親しい人々がお宅を訪ねたり招いたりして交わりを持ち、故人とその信仰を思い起こし、故人を生かした主の恵みをともに賛美することであれば有意義なことである」〔同：269〕と述べている。また、日本基督教団東京教区編集の『信徒必携』では、「教会における信仰は信仰、家庭における行事は行事として二元化されて、信仰は福音的に、生活は異教的であるという矛盾に陥ってはならない」〔日本基督教団東京教区 1991：108〕という注意がなされている。

『キリスト教慶弔学辞典』の葬に関する項目では、葬儀の精神として主の恵みへの感謝の念、迷信的要素の払拭、遺族への慰め等を挙げた後、前夜式・葬式の具体的な手順が書かれてある〔小畑進 1978：453-507〕。また、柩に向かったの弔辞は故人礼拝につながるとして戒めている。

その他、近年多くの牧師による著作が出版され、具体的な指導をしている。それらに共通しているのは、焼香など仏教色の残る行為は戒めているが、葬儀自体は遺族への慰めや励ましとして積極的な目的をもってするように示していることである。

カトリック教会では 1981（昭和 57）年に『祖先と死者についてのカトリック信者の手引』という小冊子を発行した⁶⁾。この中で死者儀礼の基本姿勢として「日本人の死者に対する儀礼の多くは、祖先に対する愛情と尊敬から生まれたものですから、この点では、カトリック教会が昔から行ってきた『死者の記念』と共通する」〔同：10〕と述べている。具体的な例としては、仏壇に関して「家族全体がカトリック信者になった場合、できれば家庭祭壇だけにしたらよいでしょう。親類などの付き合いで仏壇を取り除くことができない場合には、仏壇を安置してもかまいません」〔同：15〕と述べ、また、その前で手を合わせることについては「『主よ、かれに永遠の安息を与えたまえ』と心の中で祈」って行えばよいと認めている〔同：18〕。自分以外が仏教徒の場合の葬式をお寺ですることに対しては「それでよいでしょう。自分がカトリック信者だからといって他人の宗教を無視することは、むしろ愛

徳に反することである」と述べられている〔同：21〕。かなり在来習俗への寛容な姿勢が見られるが、一方で「子孫に罰を与えるような先祖はありません」〔同：27〕と崇りなどないことを強調してある。

以上、日本のキリスト教すべてを網羅したわけではないが、これにより、岩村牧師は葬儀や記念会に関しては独特の意味付けをしているが、基本方針や仏壇や墓地等に関しては、概ね他の牧師の教えと異なっていないことが理解されよう。

3. 大森めぐみ教会会員調査分析

それでは以下の2章において、教会員の状況・意識を探る。

まずは調査票による全体的な概観を見る。表1を中心に述べていくが、その前に分析の軸に関して簡単に述べる。特に私が注目したのは初代・二代目以上という世代区分である。ある人がキリスト教信徒として初代ならば、当然その上の世代は信徒ではない。日本の場合、熱心かどうかはともかく、仏教徒が多いのは想像に難くない。死者儀礼は江戸以降は一般に仏教と結び付き、家庭内では仏壇、家庭の外では寺院墓地における儀礼に見られる。そこで初代信徒がまず出会う障害が、仏教式の葬儀や仏壇・寺院墓地といった施設の扱いだと思われる。そこで、この統計分析において指標としたのは家の宗教、家庭内外の宗教施設、儀礼のうち最近行った結婚・葬式・記念会（法事）の形式である。この回答を、一人で住む単独世帯、夫婦だけ或いは夫婦と未婚子で住む核家族世帯、親夫婦及び子夫婦で住む直系家族世帯の三つに区分した。欠損家族もそれぞれの世帯に組み込んである。更に、教会員が世帯内で一人か二人以上かという点と、初代か二代目以上かという点で細分類した。

全会員592名と分析した206名との属性の簡単な比較を述べておく。男女比は全体が4対6であるのに対し、今回の調査対象者は3対7であった。かつ年齢構成や職業、居住区域等も大きな差はなく、全体を代表するとしてよいと思われる^m。

表1全体を通して見ていくと、家の宗教がキリスト教という回答は5割に

表1 世帯形態別・世代数別・会員人数別×家の宗教・宗教施設・宗教儀礼

		総 数	家の宗教			神 棚 あり	仏 壇 あり	あり 記念 コーナ ー	祭 壇 あり	墓 地		結 婚 式		葬 式		記念式	
			仏 教	ト キ リス 教	な し					あ ま り 地	苑 の み	あ け ほ	神 式	ト キ リス 式	仏 式	ト キ リス 式	仏 式
総 数		156 100%	42 27	81 52	31 20	13 8	50 32	48 31	7 4	106 68	21 13	22 14	108 69	58 37	56 36	53 34	47 30
単 独 世 帯	総数	16 100%	3 19	11 69	2 12	1 6	2 13	11 69	1 6	12 75	1 6	1 6	10 63	2 13	12 75	0 0	9 56
	初代	10 100%	3 30	5 50	2 20	1 10	2 20	8 80	0 0	7 70	1 10	1 10	5 50	2 20	7 70	0 0	6 60
	二代目 以上	6 100%	0 0	6 100	0 0	0 0	0 0	3 50	1 10	5 83	0 0	0 0	5 83	0 0	5 83	0 0	3 50
核 家 族 世 帯	総数	123 100%	35 28	62 50	24 20	9 7	43 35	30 24	5 4	84 68	14 11	19 15	87 71	50 41	34 28	47 38	29 24
	会員 一人	68 100%	28 41	16 23	22 32	6 9	25 37	17 25	3 4	52 76	6 9	16 24	39 57	33 49	16 24	31 46	10 15
	会員二 人以上	55 100%	7 13	46 84	2 3	3 5	18 33	13 24	2 3	32 58	8 15	3 5	48 87	17 31	18 33	16 29	19 35
	初代	82 100%	28 34	37 45	16 20	9 11	37 45	19 23	4 5	58 71	6 7	16 20	50 61	40 49	12 15	38 46	11 13
	二代目 以上	41 100%	7 17	25 61	8 20	0 0	6 15	11 27	1 2	26 63	8 20	3 7	37 90	10 24	22 54	9 22	18 44
直 系 家 族 世 帯	総数	17 100%	4 24	8 47	5 29	3 18	5 29	7 41	1 6	10 59	6 35	2 12	11 65	6 35	10 59	6 35	9 53
	会員 一人	8 100%	0 0	3 37	5 63	0 0	1 13	4 50	1 13	5 63	3 38	1 13	4 50	1 13	7 88	1 13	5 63
	会員二 人以上	9 100%	4 44	5 56	0 0	3 33	4 44	3 33	0 0	5 56	3 33	1 11	7 78	5 56	3 33	5 56	4 44
	初代	11 100%	3 27	5 45	3 27	2 18	5 45	4 36	1 9	6 55	4 36	2 18	6 55	5 45	5 45	5 45	5 45
	二代目 以上	6 100%	1 17	3 50	2 33	1 17	0 0	3 50	0 0	4 67	2 33	0 0	5 83	1 17	5 83	1 17	4 67

※ 各項目の質問事項は文末の付録を参照のこと。

※ 家の宗教は神道・天理教という回答がそれぞれ1世帯ずつある。

止まり、家の宗教はないという回答が2割ある。神棚保持は8%で仏壇保持は32%である。この結果からも、神棚は撤去しやすいが仏壇は撤去が簡単でないことが分かる。更に、最近の葬式・記念会が仏教式という回答がそれぞれ37%、34%であることも合わせて考えると、死者儀礼では特に仏教との関わりが問題となってくることが改めて明らかになる。また、墓地は合算すると8割の世帯で保持している。

核家族世帯・直系家族世帯のうち会員が一人のみという世帯は76世帯あった。その中で、世帯主たる夫が教会員でも妻は非教会員という世帯が10もある。キリスト教は本来個人に対応するものであるが、以前の農村での調査においては「家」に規制されていることが指摘されていた〔森岡 1959:222〕。そこでは、家長の受洗が家族員に及び、個人の信仰というよりは家の宗教となる傾向が見られた。現代の都市ではその規制が弱い傾向であることが予想される。それは、逆に妻が教会員で夫が非教会員の世帯が43あることから言える。妻が夫の信仰と違って、それが維持されうる状況であることが示されている。

次に世代数別に見る。すると単独世帯・核家族世帯・直系家族世帯すべてにおいて、家の宗教がキリスト教の割合が、初代より二代目以上で高いことが分かる。また、宗教儀礼においてもキリスト教式の割合が同様であり二代目以上で高い。ただ一つの例外が単独世帯の記念会で、これは単独世帯で二代目以上の残りの3名は、最近は記念会を行っていないからであった。仏壇保持に関しても初代と二代目以上で差が大きい。それぞれの割合は単独世帯で20%と0%、核家族世帯で45%と15%、直系家族世帯では45%と0%である。合算すると全体の仏壇保持率は3割だが、初代と二代目以上で分ければ4割と1割で差が大きい。以上のことから、仏教式の儀礼や仏壇保持等、死者儀礼に関する問題の多くは初代に発生し、2代目以上になると解決に向かう傾向が見られる。

次に会員が一人か二人以上かで見てみる。核家族世帯では、家の宗教がキリスト教という答えが会員一人と二人以上とで23%と84%の大きな差異が見られる。家の宗教なしは32%と3%、家の宗教が仏教は43%と13%に

なっている。従って、会員が一人の世帯は家の宗教を仏教やなしと認識し、会員が二人以上いる世帯ではキリスト教と認める傾向のあることが分かった。宗教施設においては会員数での大差は認められない。宗教儀礼は家の宗教と同様で、会員が二人以上の場合、よりキリスト教式で行われる可能性が強まる傾向が見られる。一方の直系家族世帯だが、これは対象事例数が17世帯と少ない。家の宗教では核家族と同様に会員数が多い方がキリスト教と認識している傾向を示す一方で、仏教という率も高い。また、会員が二人以上の世帯で仏教保持や仏教式儀礼が多い。この理由として一つは事例数が少ないことによる偏りが考えられる。他に親戚などとの関係や、家族の中に非信徒が多いこと、故人が仏教式を望んだことなども考えられよう。

単独世帯の事例数も16世帯と少ない。仏壇の保持は13%と他の世帯に比して最も少なく、代わりに記念コーナー⁽⁸⁾が69%と最も多い(写真3)。死者を記念する方法に対して障害が最も少ないからと言えよう。



写真3 表2⑬の記念コーナー



写真4 表2①の記念コーナー

4. 個別事例分析

(1) 儀礼(葬儀・記念会等)

前章で全体像がある程度つかめた。そこで、この章は座談会出席者の話と面接調査による具体的な事例を通したキリスト教信徒の実態と意識を考察してみる。仏壇・祭壇を持つ人(表2-1)、墓地を持つ人(表2-2)とい

表2-1 仏壇(①-⑩)・祭壇(⑪-⑫)を持つ人

	世帯状況 (世帯/構成 /会員/代数)	中にあるもの (誰の位牌かor 誰の写真か)	日常の世話 (誰が何を)	保 持 意 識
①	単独世帯 /初代	祖母・義父母	お茶・線香を毎日	先祖のつながりを切れない故人 の信仰を大事にする
②	単独世帯 /初代	義父母・夫	ベッドルームで花・ 水	位牌の入れ物 亡夫は熱心な仏 教徒なので位牌を作る
③	核/夫婦/ 夫婦/初代	義父母・父・前妻・ 娘	押入れにしまって ある	存命の母が来たときのためにあ る 位牌の収容所
④	核/夫婦/ 夫婦/初代	先祖代々・父母	義父が毎朝拝んで いる	姉妹や父の部下が来たときのた め 文化財的存在
⑤	核/夫婦子/ 母子/初代	義父母	夫が毎朝水・線香	彼岸に兄弟が集まる機会となる
⑥	核/夫婦子/ 母子/初代	父母	押入れ、旧盆・正月 に住職来る	故人の信仰を大切に 50回 忌後はクローズしたい
⑦	核/夫婦子/ 夫婦/2代目以上	父母・姉	夫が毎朝水・線香	兄弟や孫がきて挨拶している 長男なので持つ
⑧	核/母子/母/ 2代目以上	義父母・義姉	仏間に扉を閉めた まま	捨てるもの躊躇われる 命日には写真をだす
⑨	直系/母子夫婦 /夫婦/初代	父母	継母のモノだが実 際は自分が世話	信仰にこだわらない
⑩	直系/両親娘孫 /娘孫/初代	夫	義父が毎朝拝んで いる	両親の信仰を大切に する 信仰と先祖の使い分け
⑪	核/夫婦子/ 夫婦/初代	母	毎朝線香・花	故人のための形があると落ち着 く
⑫	直系/母子夫婦 孫/夫/初代	娘・父	妻が管理している	非信徒とのコミュニケーション として

表2-2 墓地を持つ人

	世帯状況 (世帯/構成 /会員/代数)	宗教/被埋葬者/ 継承者	墓 参 状 況	保 持 意 識
②	単独世帯/初代	浄土宗/先祖代々・ 夫/自分	夫の死後毎月一度	娘は受洗していないので継承す るだろう 自分はあけぼの苑
⑬	単独世帯/初代	キリスト教/妻/ 自分	日曜礼拝のとき	先祖の墓は名古屋、妻はあけぼ の苑、自分もあけぼの苑へ
④	核/夫婦/ 夫婦/初代	無宗教/父母/自 分	春秋の彼岸に兄弟 たちと	父母の葬式は真宗だが、昭和63 年に無宗教へ改葬
⑭	核/夫婦子/ 夫婦/初代	曹洞宗/先祖代々 /自分	彼岸に行く程度	父は養子で継承せねばと思うが 自分はあけぼの苑にしたい
⑧	核/母子/母/ 2代目以上	無宗教/義父母・ 夫・姉/自分	春秋の彼岸に行く	娘が継承することは話し合い済 自分も難司ヶ谷へ
⑨	直系/母子夫婦 /夫婦/初代	無宗教/父母/自 分	最近造った 前は 石川県で年1度位	自宅に近くで無宗教の墓地なの で息子が継承してくれる
⑫	直系/母子夫婦 孫/夫/初代	キリスト教/娘/ 自分	日曜礼拝のとき	自分はあけぼの苑へ、妻は実家 の方と選択すればいい

う2つの表により、個別事例を簡単にまとめたが、そのうちの幾つかについて詳しくみていく。

まず、表では明らかになってはいないが葬儀・記念会等の儀礼についてみる。②は1年前に夫を亡くした。亡夫が高齢であったため、実際に葬式に出席したのは同年輩つまり亡夫の友人・職場関係より、子供の関係者が多かった。しかし、故人の略歴や思い出を述べ、故人の選んだ讃美歌を歌ったことにより、直接知らなかった人たちにも亡夫を知ってもらうことができ、亡夫を偲ぶのにとっても良かったと言う。また、⑩は記念会を自宅でした。同居していた夫の両親はキリスト教信徒ではなかったが、本人たちのキリスト教信仰に理解があった。夫が喪主となるので葬式はキリスト教で行うことを生前から話し合っていた。実際に母が亡くなったとき、祭壇を父が設計して大森めぐみ教会の社会福祉法人牧人会が製作した。死後7週目の記念会に間に合い、その祭壇を中心にして記念会をしたところ、「キリスト教でも死者のことを考えている」と参加した非信徒に大変好評だったと言う。

(2) 家庭内宗教施設（仏壇・祭壇等）

次に家庭内宗教施設の仏壇と祭壇について述べよう。

①は単独世帯の例で亡夫には記念コーナーを設けている（写真4）。しかし一方で、亡くなった義母が生前に買った仏壇に、祖母と義父母の位牌を置いて毎日お茶とお線香を欠かさずに世話をしているという。特に拝むことはないが、仏壇を大切に扱っていた義母の姿を見ていたので、その義母の信仰を大事にしたいと語っている。③は夫婦とも教会員の例で、受洗後本尊は焼き捨てたが、位牌は捨てることはできなかったと言う。現在は位牌のみ置いてあり、それは妹の家に住んでいる母が来るためのためであると言う。本尊を処理したという例は他にもあったが、位牌を捨てたという例はなかった。仏壇を問題にしてきたが、信徒は仏壇自体より中の位牌の方を重視していることが分かった。

④も夫婦とも教会員の例である。ここでは仏壇をなくせない理由が二つ述べられた。一つは亡母が仏壇を大切にしていたからというものである。もう

一つは亡父の部下や姉妹が度々訪ねてくるときに、彼らが故人を偲ぶ場所として仏壇を必要としているだろうと思うからという。そのため完全に処分できず、普段は押入れに入れておくが、必要に応じて出すと言う（写真5）。自分たちは故人の写真を居間に飾っている。⑩は夫を亡くして義父母と子供と同居しているケースである。夫が亡くなったときに義父が熱心な仏教徒で仏壇を購入したというものである。自らはキリスト教信徒ということでその対応に悩んだが、現在でも両親と同居しているため、嫁として義父母の信仰を無視できず、実際の世話は自分がしていると言う。

仏壇がある場合、もらってくれる親族がいればそちらへ、預かってくれる寺院があればそちらへと処理するケースも見られた。しかし、そうでない場合はそのまま残しておく。保持している理由として特に強調されたのは、故人の信仰を大切にしたいということである。キリスト教信徒である自らの信仰と他人の信仰の相互容認の姿勢を持っている。これは、自分が仏壇を管理することになっても同じである。信徒たちは仏壇を仏教的設備とみているのではないし、ましてや先祖の霊が崇るから拝むのだと考えているのではないことは明らかとなった。しかし、霊の依り代という認識はなくても、位牌は親や兄弟が生きていた証として、更には生前知っている近い先祖と自分とのつながりを示すものとして保持しているようである。また③や④から、仏壇は親戚・知人等の非信徒とのネットワークの一拠点ともなっているようである。

もう一つの家庭内宗教施設、キリスト教式祭壇を持っているケースはまれである。記念コーナーとして部屋の一角に写真や十字架を置くことはあっても、祭壇を作るには至っていない。全体の統計でも記念コーナーは31%だが、祭壇は4%の保持率しかない。⑫は直系家族で夫のみ会員のケースである。娘が亡くなって、夫の意思で祭壇を購入したものである。ただし、その中には写真と故人の思い出の品を飾っている他、既に亡くなっていた父の位牌も一緒に入れている（写真6）。これは非信徒である妻の心情も考えた一種の妥協だと思っている。結局、祭壇に本尊のかわりに十字架があるのが大きな違いで、信徒と非信徒がともに死者を記念する場所としてこの祭壇を利用しており、彼は非信徒とのコミュニケーションのために効用があると言う。

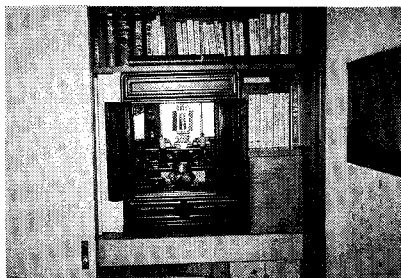


写真5 表2④の仏壇



写真6 表2⑫のキリスト教式祭壇

(3) 家庭外宗教施設（墓地）

最後に家庭外の宗教施設、墓地についての具体的な事例を見る。

⑬は単独世帯で、亡妻の遺骨はあけぼの苑にあり、自らもそこに入る予定である。子供たちが教会員なので、日曜礼拝の後に墓参できるというメリットがあると言う。先祖代々の墓は名古屋にあるので、その処理が残された課題である。⑭は夫が養子であり、先祖代々の寺院墓地をどうしようかと悩んでいる。幸いにも最近では家庭に死者がないから、寺院とは両親の法事くらいのつきあいですんでいるが、そろそろ自分たちのことを考えはじめ悩んでいる所だと言う。夫婦とも教会員なので、自分たちはあけぼの苑に入りたい。しかし、二人の娘は非信徒で、彼女たちが先祖のいる寺院墓地とあけぼの苑との両方のかかえるのは大変だろうと思っている。そこであけぼの苑の予約に踏み切れず、現在悩んでいるというのである。

⑧は亡夫及びその両親・姉は雑司ヶ谷霊園に埋葬されている。昭和初期から利用しているのである。自分もそこに入る予定で、口約束で子供が継承すると決まっている。無宗教の都営霊園だから、子孫がキリスト教信徒でなくても継承してくれるので安心だと思っている。一方、⑨は子供が非信徒で、自分たち夫婦は信徒というケースである。自分たちは寺院にある先祖代々の

墓に埋葬されたくないが、あけぼの苑では子供たちが継承してくれそうもない。そこで最近、自宅近くの無宗教の公園墓地を一区画確保したという。

以上のことから、墓地に関しては子孫への継承を中心に考えているようである。そして、その解決策として用いられるのが無宗教の公園墓地への改葬である。クリスチャンホームでない場合、先代以前は寺院墓地に埋葬されていることが多く、その場合、自分たちだけあけぼの苑に入ると、子孫が二つの墓地を抱えることとなる。それでは子孫が困るだろうから墓地は一つにしたいというのである。そして、子孫の信仰がキリスト教でなくても困らぬように宗教色のない公園墓地を求めることになる。

先述したように、あけぼの苑はロッカーが200個あるうち、現在の利用数は59個に過ぎず、利用率は29.5%である。完成してから20年たった今でも利用の増加がない一つの理由は、クリスチャンホーム化していない家庭が、宗教色のない墓地を求める傾向にあるからだと言えよう。

ところで、森岡清美及び孝本貢の考察^⑨から、現代の先祖祭祀が家の永続を第一義とした系譜的なものから、夫婦制家族に適合する双系的な縁的なものへの変化を見て取れる。キリスト教信徒たちの死者儀礼への対応は、亡くなった者への思慕と同時に個人の信仰や施設では継承が重視されている。個人を起点としているところは、先の考察の一つの傍証となるだろう。

5. 考 察

本章では、死者儀礼のキリスト教的意味付けを、今まで見てきた牧師の考えと教会員の実態・意識とを比較し考察する。

牧師は積極的にキリスト教意味付けをした死者儀礼を教会員に提示している。それは、葬儀の意味、教会墓地の設置、死者のための祈祷、記念会実施などに顕れている。そこで、牧師の指導に対して教会員がどう意識しているか対応しているかがポイントとなる。

教会員のうち初代信徒は、現代でも日本の宗教習俗への対処に苦慮している。特に、避け難い仏教色の濃い死者儀礼が問題となる。それはクリスチャ

ンホームに生まれえない限り、定着している仏教式の儀礼が自分の前の代まで関わってきているからである。しかし、二代目以上の信徒の場合は家庭内にキリスト教信徒もおり環境が整うことから、施設や儀礼がキリスト教式へ替わることが多くなるだろう。葬儀や記念会に関しては牧師の提案が概ね受け入れられている。ただし、仏教式の法事への参加には、宗教的意味は認められてはいないが、親戚の集まる機会としては好意的に受入れられている。それは、日本では小さなパーティーを開いて皆を招待するなどということが少なく、親族家族一同が集まる機会としては正月や盆、結婚式や葬式、法事といった儀礼に限られることと関連する。

一方で苦慮が感じられないケースもある。それは、牧師がクリスチャンホームを目指しているにもかかわらず、宗教を「家」のものとしてより、個人の信仰として考えているため、先祖や子孫の信仰が自分と別であっても構わないと考えているからである。宗教施設においてその考えは反映される。まず、仏壇においてはその保持を二つの理由で意味付けしている。他の家族員が所有している場合はその人の、管理者が自分となった場合は以前所有していた故人の信仰を大切に思う気持ちがその一つである。また、故人となった近親への思いが強く、位牌を残して思い出の場としている。ただし、写真と十字架という形式の記念コーナー保持と仏壇保持の割合が同程度である点を見ても、キリスト教的意味付けを目指す牧師と他の信徒との意識の乖離が読みとれる。墓地は子孫への継承を前提として考えることが多い。特に先祖代々の寺院墓地を継承した場合、自らはそこに入る訳にはいかず、かといってあけぼの苑を利用すると子孫に墓地を二つ残すことになってしまう。そこで、無宗教的な公園墓地へ改葬し、家族墓として子孫に残すことを目指す傾向がある。牧師は「ゆりかごから墓場まで」の教会教育を実践し、教会敷地内に納骨堂を建設したが、利用率は低く、十分生かされているとはいえない。牧師は教義の面から教会員に伝えていかねばならないが、教会員個別のケースとなると千差万別である。教会員の重大な関心というのはキリスト教的意味付けよりも現実はどうするかという方である。

脚註(1)で見たような幕末明治初期の信徒たちは、キリスト教という宗教の

教えが全く新しいものだったが故に、より純粋な気持ちで仏教と対立した。しかし、新教の宣教開始からでも1世紀以上を経た現代では、キリスト教の教え自体は正確にはないとしても広範囲に知られている。そこで、過激な対立よりむしろ在来の習俗との穏やかな融和・定着がはかられていくこととなる。しかし、指導者たちがキリスト教的意味付けをしても、信徒の方ではそれを全面的に受け入れているのではない。現実的実地的な処理を行っている。意味付けを放棄している訳ではないが、意識でも行動でも牧師ほど積極的な意味付けをしていないことが判明した。

これをまとめると以下のような仮説を持つことができる。

- (1) 儀礼(葬儀・記念会)に関しては牧師の提案が概ね受け入れられている。
- (2) 初代信徒は仏教式の儀礼や仏壇処理の問題が発生する。
- (3) 二代目以上の信徒では家庭環境が整うので問題発生は少ない。
- (4) いずれにせよ、信徒は現実的な処理を行うケースが多く、仏壇を燃やしたりする過激な行動はあまりおこさない。
- (5) 墓地に関しては、無宗教公園墓地による解決を図ることが多い。
- (6) 結局、信徒自身は牧師の意味付けの線に沿いつつも、なお、これを実現しているとは言いがたい。

前述の通り、都市部の教会における調査は少ない。また、死者儀礼に関する牧師の著書は出版されているが、信徒たちの統計資料となると皆無であろう。今後は、本章で得られた予備的仮説を検証すべく、他の教会においての同様の調査を実施したいと考えている。

〈註〉

- 1) キリスト教信徒が死者儀礼に関連して起こした事件について触れておく。
まず、江戸末期に浦上自葬事件があった。檀那寺の僧の立ち合いなしにキリスト教の宗旨に沿った葬儀を連続して行い、更にはその檀那寺との絶縁を宣言したため浦上村民がキリシタンであることが判明して大量検挙となった事件である。以降、1872(明治5)年の太政官布告192号で自葬が禁止され、1874(明治7)年の内務卿口達でキリスト教式葬儀が可能となった。しかし、家庭

の中で他に受洗者がいない場合や世帯主が受洗していない場合などでは、葬式等が仏教の干渉下におかれる例も見られた〔森岡 1965 : 67〕。また、仏壇投棄の事例としては〔西山 1973 : 30〕などがある。

- 2) 従来のキリスト教教会調査は、主に農村や小都市での個別教会における受容がそのテーマとなっていた。安中教会を扱った森岡清美・新保満〔1959〕、下総福田聖公会を扱った西山茂〔1975〕、磯岡哲也〔1983〕などではいずれも農村の教会を対象にしており、家長が信徒である場合を「基督教の家」と呼び、そうでない場合の「仏教の家」と区別して考察をしている。先祖を大切にする例としては改宗したものの「先祖が崇敬したものであるから粗末にとりあつかってはならぬ」〔森岡 1965 : 230〕ということで、仏壇を保持するケースに見られる。
- 3) 最近5年間に発行された『宗教年鑑』によって新旧両教の合計を見ると、1988年度(1987年末現在の統計)から順に 89.6 → 89.6 → 92.1 → 92.5 → 94.5 (いずれも万人) となっている。近年は微増の傾向にあるが、いずれにせよ総人口の1%未満に止まる。
- 4) クリスマンホームは夫婦が信徒である家庭を指す。現代の夫婦制家族に適合した用語である。従来使用された「仏教の家」や「基督教の家」という用語は、世帯主の帰属により家全体の帰属を指し示したが、現代の都市部では個人の信仰と家の宗教が異なっているケースを考慮せねばなるまい。教会として牧師は家庭伝道を勧める。そして、夫婦揃ってキリスト教信徒となる場合がクリスマンホームなのである。今回の調査ではこれに該当するのは単独世帯16を除いた140世帯のうち、53世帯(38%)に止まった。
- 5) 『日本基督教団年鑑 1993』によると、1992年3月31日現在、東京教区に所属し東京都内で活動中の教会は一種教会156、二種教会93、伝道所28の合計277ある。そこで、その中で大森めぐみ教会と同じ一種教会のうち、75の教会について墓地の有無を確認する予備調査を行った(1992年10-11月)。すると、以下のような結果となり、大森めぐみ教会が教会敷地内に納骨堂を保有しているということは極めて珍しい例であることが判明した。

教会墓地を持っている教会が58(77.3%)、持っていない教会が17(22.7

%)。持っている場合、公営（都営及び市営）霊園に区画を所有するのが 27 教会、民営の霊園に区画を所有するのが 30 教会、教会敷地内に納骨堂を持っているのが 1 教会、つまり大森めぐみ教会のみであった。また、信徒数が 250 名を越える（19 教会、32.8 %）教会ではすべてが墓地を持っていた。

- 6) 『手引』に関しては『出会い』8-2,8-3〔1986〕において幾つもの論考があるので参照されたい。また、それを踏まえた最近の論考として、〔ヤン・スィングドー 1992 : 59-81〕も参照されたい。

- 7) 以下、調査対象者の属性について述べる。教会員全体の年齢構成は、10 歳刻みで算出すると、10 代以下 6 %、20 代 13 %、30 代 13 %、40 代 15 %、50 代 23 %、60 代 18 %、70 代 8 %、80 代以上 4 %となる。調査対象者では、10 代 1 %、20 代 9 %、30 代 14 %、40 代 15 %、50 代 22 %、60 代 24 %、70 代 11 %、80 代以上 4 %、であった。従って、やや高齢者に偏っているとも言えるが、それは大学生年齢未満を除いたからであろう。次に、職業と学歴についてであるが、全体は不明のため調査対象者のみ述べる。自営 1 %、経営・管理 14 %、被雇用者 14 %、学生・無職 14 %、専門・自由 24 %、主婦 31 %となっている。対象者に女子が多かったため、主婦の割合が高い。また、学歴は旧小新中学 1 %、旧中学・旧高女・新高校 21 %、専門・短大・高専 29 %、旧高専・新大学 48 %、専門・短大・大学在学中 1 %であった。更に、教会員全体の居住区域は、大田区が 44 %、他の区部が 16 %、横浜・川崎が 10 %、都内が 6 %、神奈川県内が 6 %、千葉県 4 %となるのに対し、調査対象世帯となると、大田区が 54 %、他の区部が 16 %、横浜・川崎が 12 %、都内が 5 %、神奈川県内が 5 %、千葉県 3 %となり、やや大田区に偏りがあるが、これは対象設定上遠方者を除いたためと思われる。

対象世帯内での会員数は、156 世帯のうち会員一人のみが 92 世帯（59 %）、二人 38 世帯（24 %）、三人 15 世帯（10 %）、四人 9 世帯（6 %）、五人 2 世帯（1 %）であり、二人以上を合算すれば 64 世帯（41 %）となる。世帯形態分布は、単独世帯 16（10 %）、核家族 123（79 %）、直系家族 17（11 %）であった。核家族の中では夫婦と子の組み合わせが 81（52 %）、夫婦のみ 26（17 %）、母子 13（8 %）であり、直系家族では母・子夫婦・孫が 11（7 %）

であった。

- 8) 「記念コーナー」は一般的な用語としてはまだ通じていないが、本稿では西山茂の言う「仏壇代替物」とほぼ同義として使用している。仏壇代替物とは、「厨子のない『先祖を敬う場所』のこと」である。「それには一般に十字架・逝去者の写真・花瓶・香炉などが置かれている」〔西山 1975 : 67〕。ただし、キリスト教式家庭祭壇の代替物とも考えられるので、本稿では死者を記念する場所として「記念コーナー」の語を用いた。教会員に質問する際にもこの用語で何を指しているか理解されており、具体例としては写真3、4を参照されたい。
- 9) 〔森岡：1984〕や〔孝本：1988、1992〕等を参照されたい。新たな傾向として霊友会系教団に代表される双系的な先祖観を指摘しつつ、森岡は主に仏壇保持調査から、孝本は主に墓地調査から先祖祭祀の変容を述べている。

〈付 録〉

表1における質問事項の詳細は以下の通りである。

質問9 お宅様の家の現在の宗教は何ですか。

- (1) 神道 (2) 仏教 (3) キリスト教 (5) その他()
(6) 家の宗教というものはない

質問10 お宅様では神棚がありますか。

- (1) ある (2) もともとない
(3) 以前はあったが、現在はない

質問13 お宅様では仏壇がありますか。

- (1) ある (2) もともとない
(3) 以前はあったが、現在はない

質問16 お宅様では、キリスト教式祭壇もしくは故人を記念するコーナーをしつらえてありますか。

- (1) 祭壇がある
(2) 祭壇はないが、故人を記念するコーナーはある

(3) 以前はあったが、現在はない

(4) もともとない

質問 18 お宅様では墓地がありますか。

(1) ある (2) 墓地はないが納骨の場所はある

(3) 墓地も納骨の場所もない (4) わからない

質問 28 お宅様で最も最近なさった結婚式は何式でしたか。

(1) 神道 (2) 仏教 (3) キリシト教 (4) その他()

(5) わからない

質問 30 お宅様で最も最近なさった葬式は何式でしたか。

(1) 神道 (2) 仏教 (3) キリシト教 (4) その他()

(5) 経験していない

質問 32 お宅様で最も最近なさった記念会(年忌法要)の形式は何でしたか。

(1) 神道 (2) 仏教 (3) キリシト教 (4) その他()

(5) 経験していない

〈文 献〉

文化庁編, 1989-1993『宗教年鑑』ぎょうせい

橋本 巽, 1984『日本人と祖先崇拜』いのちのことば社

堀越暢治, 1989『新版 キリストにある死および死後の問題』いのちのことば社

磯岡哲也, 1983「日本村落における基督教の受容—千葉県福田聖公会の事例—」

成城大学大学院『常民文化』6: 1-34

岩村信二, 1990『三代目のキリスト教—伝統文化との対立から深化へ—』新教出版社

———, 1993『ガンを知らされた牧師先生』新教出版社

泉富士男, 1992『カトリック冠婚葬祭』中央出版社

カトリック諸宗教委員会編, 1985『祖先と死者についてのカトリックの手引き』
カトリック中央協議会

- 勝本正實, 1990『日本の宗教行事にどう対応するか』いのちのことば社
- 勝村泰三, 1986『「お葬式の写真」を考える』『出合い』8-3 : 54-57
- 孝本 貢, 1978「都市家族における先祖祭祀観—系譜的先祖祭祀から縁的先祖祭祀へ—」宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣 : 52-65
- 1986「現代日本における先祖祭祀の研究課題—作業仮説の作成に向けて—」森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房 : 5-32
- 1988「現代における先祖祭祀の変容」石川利夫他編『シリーズ家族史1 生者と死者—祖先祭祀—』三省堂 : 83-106
- 1992「社会学における先祖祭祀研究の現在」国立歴史民俗博物館『研究報告第41集』 : 23-31
- 三森春生, 1989『キリスト教、そこが知りたい…お答えします。Q&A』ミッション・エイド・カナン
- 森岡清美, 1959「日本農村における基督教の受容」明治史料研究連絡会編『明治史研究叢書第2期第4巻 近代思想の形成』御茶の水書房 : 193-240
- 1965「日本農村における基督教の土着化（上）—山梨県日下部教会の場合—」東京教育大学文学部紀要『社会科学論集』12 : 1-82
- 1984『家の変貌と先祖の祭』日本基督教団出版局
- 1991『大正期生まれの教団首脳のライフコース』平成元、2年科学研究費補助金（一般研究c）研究成果報告書
- 森岡清美・新保満, 1959『地方小都市におけるキリスト教会の形成』日本基督教団宣教研究所
- M. クリスチャン, 1976『カトリックの祖先崇敬』オリエンツ宗教研究所
- 中村智博, 1992『キリスト教に戸固め』いのちのことば社
- 南山大学監修, 1986『第二バチカン公会議公文書全集』中央出版社
- 日本基督教団信仰職制委員会編, 1988『日本基督教団口語式文』日本基督教団出版局

- 日本基督教団東京教区編, 1991『信徒必携 改訂新版』日本基督教団出版局
- 西山 茂, 1973「下総福田聖公会の形成と展開(下)」『神学の声』19-2
: 21-30
- 1975「日本村落における基督教の定着と変容—千葉県下総福田聖公会の事例—」『社会学評論』101: 67-72
- 小畑 進, 1978『キリスト教慶弔学辞典』いのちのことば社
- R.J. スミス, 前田隆訳, 1981『現代日本の祖先崇拝(上)』御茶の水書房
———, 1983『現代日本の祖先崇拝(下)』御茶の水書房
- 斎藤篤美, 1989『日本の“習俗”とキリスト者』いのちのことば社
- 佐藤 裕, 1969「日本プロテスタント教会の都市的中産階級性格の実証的研究」『神学の声』16-1: 1-25
- 鈴木範久・ヨゼフ J スパー編, 1968『日本人のみたキリスト教』オリエンス宗教研究所
- 鈴木有郷, 1986, 「『日本人の問題としての祖先崇拝』—アメリカ日系人の経験を通して—」『出会』8-3: 19-31
- 高地時夫, 1969, 「キリスト教の死後観と死者儀礼」『出会』2-4: 14-25
- 東門陽二郎, 1986, 「『祖先と死者についてのカトリック信者の手引』について」『出会』8-3: 32-51
- 宇田 進・鈴木昌他編, 1991『新キリスト教辞典』いのちのことば社
- 山本尚忠, 1974「今日の日本における葬儀の諸問題」日本基督教団信仰職制委員会編『死と葬儀』日本基督教団出版局: 253-271
- , 1979『教会生活の手引き 6 死と葬儀』日本基督教団出版局
- ヤン・スィングドー, 1992「キリスト教と日本の宗教文化の出会い—祖先崇拝に対するカトリックの態度を中心にして—」脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学 4 権威の構築と破壊』東京大学出版会: 59-81
- 幸日出男, 1985「キリスト教と『祖先崇拝』の問題—カトリック教会の『手引』をめぐる—」『出会』8-2: 52-56